

## レファレンス・コーナー -- 世界の水資源事情(3) (ブックシェルフ)

著者	佐々木 茂子
権利	Copyrights 日本貿易振興機構(ジェトロ)アジア 経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) <a href="http://www.ide.go.jp">http://www.ide.go.jp</a>
雑誌名	アジ研ワールド・トレンド
巻	133
ページ	51-51
発行年	2006-10
出版者	日本貿易振興機構アジア経済研究所
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2344/00005393">http://hdl.handle.net/2344/00005393</a>

## レファレンス

### コーナー

### (3) 世界の水資源事情

佐々木茂子

「水が文明を突き破る」と印象的な後書きを残すのは湯浅利男著『文明の中の水 人類最大の資源をめぐる一万年史』（新訂版 二〇〇四年）である。世界各地の文明と水の関係を豊富な事例と壮大なスケールで描き「人間が地球のうえで、地球によって生きている事実」を訴える。

日高敏隆・中尾正義編『シルクロードの水と緑はどこへ消えたか?』（昭和堂 二〇〇六年）は総合地球環境学研究所オアシスプロジェクト（略称）の成果をまとめたものである。オアシス周辺地域の歴史を検証し、シルクロードの水消滅から「世界水危機」の本質について考察する。地図を駆使して水資源問題の現状を訴えるのはロビン・クラーク、ジャネット・キング共著『水の世界地図』（丸善 二〇〇六年）である。

貧困、災害、食糧不足など世界が抱える様々な課題には水問題の解決が深く関わっているが、本書はこれら

の問題をバランスよく網羅し世界地図の上に展開して見せる。

ワールド・ウオッチ研究所の創設者レスター・ブラウンは『地球白書』『地球環境データブック』等を通じて水をはじめとする地球環境悪化について警鐘を鳴らしてきた。二〇〇一年、新たにアリス・ポリシー研究所を創設し、その著作『エコ・エコノミー』（家の光協会 二〇〇二年）の中で、これまでは概ね市場原理によって形成されてきた経済を、今後は生態学の法則に基づく経済へとシフトするよう提案している。

水資源問題に関して国別に見た時、中国を扱う資料が多いのはその影響力を考えれば当然である。世界人口の約五分の一を占め、近年めざましい経済成長を続ける中国は抱える環境問題も桁外れである。断流、洪水、水質汚染、砂漠化等々、水に関するものだけでも環境面へのストレスは甚大である。

中国環境問題研究会編『中国環境ハンドブック二〇〇五―二〇〇六年版』（蒼書社 二〇〇四年）は環境被害・紛争の実態やNGO活動など様々な切り口から中国の現状を紹介している。データも豊富であり、水資源を含めた環境問題全般の理解に役立つ資料である。

一方で中国の環境問題を生み出す制度、社会、政治、経済に着目し、構造分析を試みるのはエリザベス・エコノミー著『中国環境リポート』（築地書館 二〇〇五年）である。

著者は米国を代表する外交シンクタンクのアジア研究部長である。

『アジア遊学』第七五号は「黄河は流れず アジアの水問題」という特集を組んでおり、この他にも黄河流域に焦点をあてた『中国北部水資源問題の実情と課題 黄河流域における水需給の分析』（国際協力銀行 二〇〇四年）や東北三省で実施したフィールド調査結果をまとめた原剛著『中国は持続可能な社会か 農業と環境問題から検証する』（同友館 二〇〇五年）がそれぞれ刊行されている。

さらに、中国の環境ビジネスに焦点をあてたものでは、清華大学編『中国における水質環境ビジネス』（神鋼リサーチ 二〇〇四年）、孫佑海著『日本企業のための中国環境法』（神鋼リサーチ 二〇〇六年）等が挙げられる。

中国と並ぶ人口を擁し、同じく経済成長著しいインドについては、多田博一著『インドの水問題 州際河川水紛争を中心に』（創土社 二〇〇五年）が詳しい。

また、渡辺晋著『水の警鐘 世界の河川・湖沼問題を歩く』（水曜社 二〇〇四年）は新聞の論説委員を務める著者が世界の水問題の現場を報告するものである。

最後に河川管理に関する資料を何点か紹介して結びとしたい。  
高橋裕編『地球の水危機 日本はどうする』（山海堂 二〇〇三年）は、国際シンポジウム「グローバル時代

を迎える水と河川」の記録に参加者の評価と感想を加えて編纂したものである。

蔵治光一郎・保屋野初子編『緑のダム 森林・河川・水循環・防災』（築地書館 二〇〇四年）は昨今また話題に上り始めた「緑のダム」について、日本におけるこれまでの研究成果と論点を整理し、森林のダム機能に関して異なる立場にある人々の意見を紹介する。保屋野は本書に先立つ『川とヨーロッパ 河川再自然化という思想』（築地書館 二〇〇三年）の中で、ヨーロッパで進む新しい治水思想を報告している。それは氾濫原を回復して河川の再自然化を目指すものである。嘉田由紀子編『水をめぐる人と自然 日本と世界の現場から』（有斐閣 二〇〇三年）の第二章でも自然再生事業について触れている。

また、小塩和人著『水の世界史 南カリフォルニアの二〇世紀』は米国の「ダム時代」がいかにして生まれ、変容していったか、その水利政策の展開を分析しており興味深い。

サンドラ・ポステル、ブライアン・リクター共著『生命の川』（新樹社 二〇〇六年）は、人間の必要と河川そのものにととの水の必要性ととのバランスを改善することが二世紀型河川管理の課題であるとし、オーストラリア、南アフリカ、米国内の国々の事例を紹介している。  
（ささき しげこ／アジア経済研究所図書館）